長六尺餘もありし事にや。

さて此合戦土人の云ひ傳ふは、大友勢初は柴手山に屯せしに、ひら場に下りて戦んと、此時にも吉弘大友を諌めしかど聞き入れずして立石山に陣取り、黒田の大軍は地の利のよき実相寺山へ本陣を居え、敵のかかるを待ちて大利を得し軍にて、大友愚かなる将なりしと、此地の土民だに言傳ふ事なり。

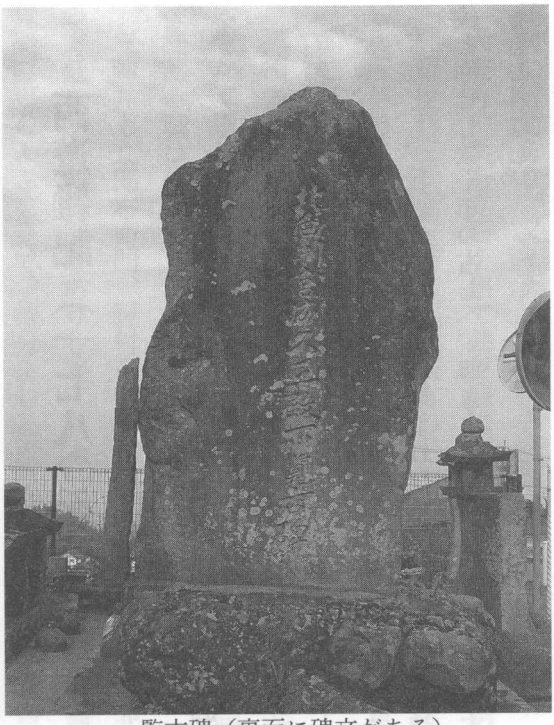
○古川古松軒（一七二六～一八〇七）
江戸時代中期の地理学者・蘭医。備中（岡山県）の人。長崎に行き蘭学を学び、特に測量に長じた。諸国を周遊して風俗・物産・史跡などを研究した。

北白川宮成久王殿下
覧古碑文について

研修部

大正六年（一九一七）十月九日、北白川宮成久親王が南立石本村を訪問され、現記念碑建立の地（宗像掃部陣所跡）から、石垣原古戦場を俯瞰された。

この慶事を記念して、翌大正七年に現地に記念碑が建立されたが、碑裏面にそのときの情景を刻字したものがこの碑文です。建立以来八〇余年の歳月が経過しているため、判読も難しくなりつつありましたが、何とか書写して「別府史談」の一隅に掲載することを得ました。なお、読み下し文については、細部にわたり、国東高校教諭（元大分県先哲資料館主任研究員）田本政宏氏にご指導をお願いした。誌上をかりて厚くお礼申し上げる次第です。



覧古碑（裏面に碑文がある）

覧古碑文

北白川宮成久王覧古碑文

大分県速見郡石垣村南立石有一大老松土人呼為鐘懸之松何也昔者大友義統欲恢復家業據此地檄遠近舊臣合之黒田孝高来逼迎戦石垣原當此時懸大鐘此松撃以勵士気故名之大正六年十月九日　北白川宮成久王殿下　来就松下臨眺知事新妻駒五郎已下從之　殿下問風俗之美悪民生之勤怠田圃之肥瘠林野之多寡村長帆足藏太進具申之　殿下一・首肯殿下又問石垣原之事蔵太上自著石垣原戦記詳述鐘懸松之故吉弘統幸死戦之状及其墓所彼我勝敗所由　殿下感嘆久之人皆服　殿下傾心民與兵之懇到深遠喜村長不遺事要不失禮敬之力村民相慶曰　殿下来留蹤榮耀至大也豈可忘乎樹碑記以垂萬世村人有請於是乎作之

大正七年二月十一日　勤皇遺民毛利莫　敬撰并書

大分県知事従四位勲三等新妻駒五郎謹書

（読み下し文）

大分県速見郡石垣村南立石ニ一大老松有リ。土人呼ビテ鐘懸之松ト為ス。何ユエナルヤ。昔ハ大友義統家業ヲ恢復セント欲シテ此ノ地ニ據リ、遠近ノ舊臣ニ檄シテ之ヲ合ハス。黒田孝高　来逼シ、石垣原ニ迎エ戦フ。此時ニ當リ、大鐘ヲ此松ニ懸ケテ撃チ、以テ士気ヲ勵マス。故ニ之ヲ名ヅク。大正六年十月九日　北白川宮成久王殿下来ラレ　松下ニ就キテ臨眺ス。知事新妻駒五郎已下　之ニ従ウ。殿下　風俗ノ美悪・民生ノ勤怠・田圃ノ肥瘠・林野ノ多寡ヲ問フ。村長帆足藏太進ミテ之ヲ具申ス、殿下一々首肯ス。殿下又石垣原ノ事ヲ問フ、藏太自著石垣原戦記ヲ上リ、鐘懸ノ松ノ故・吉弘統幸死戦ノ状及ビ其ノ墓所・彼我ノ勝敗ノ所由ヲ詳述ス。殿下感嘆之ヲ久シクシ、人皆服ス。殿下心ヲ民ト兵トノ懇到ニ深ク傾ケ、喜ヲ深遠ニ村長ノ事ノ要ヲ遺レズ禮敬之力ヲ失ハザルヲ喜ブ。村民相慶シテ曰ク、殿下来ラレ蹤ヲ留ムルハ栄耀至大ナリ。豈（ニ）忘ルベケンヤ。樹碑ヲ記シテ、以テ萬世ニ垂レン。村人ノ請フ有リ、是ニ於テ之ヲ作ル。

大正七年二月十一日　勤王遺民毛利莫　敬シテ撰シ并セテ書ス。

大分県知事従四位勲三等新妻駒五郎謹ンデ書ス。

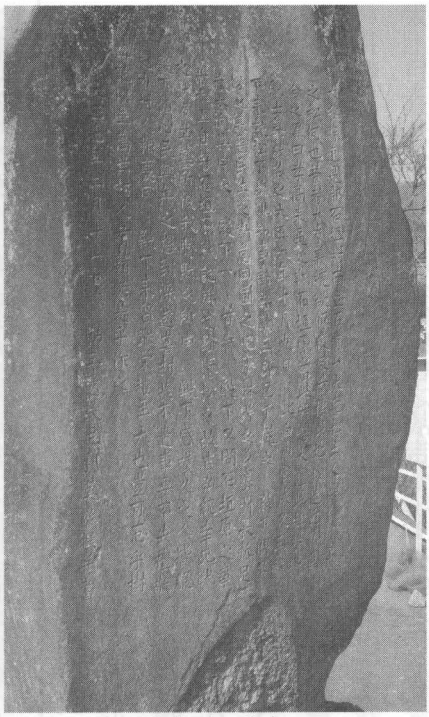
○恢復…回復

○據…拠

○舊臣…旧臣

○當…当

○勵…励
○臨眺…お眺め遊ばされる
○已下…以下
○上リ＝奉リ
○所由…原因・理由・事情などの意
○懇到…親切な気持ちがよく行き渡ること
○要…要点
○遺レズ…忘れない
○禮敬…礼敬
○力…つとめ
○躍（しょう）…あと


碑裏面の碑文

○榮耀…栄耀
○遺民…「生き残り」、自分を卑下した云い方、（「おめおめと生き恥をさらしている」とのニュアンス
○毛利莫…毛利空桑の子孫

明治三〇年代の堀田界隈

『明治三十五年大分県案内』（第九回西南区実業大会より）

堀田の湯（泉質省略）旅館業を営むもの十三戸、金田屋・濱屋・萬屋最も名あり。堀田より西に向かい玖珠街道（小国道）を上ること一里、（中略）活火山鶴見の半腹字鳥居に出ず。（中略）鳥居より二里進めば名山由布の山麓に出ず。山麓に嶽本・湯の坪・石松・山崎等の温泉場あり。総称して湯布院の温泉と云う。（研修部）